

Aṭṭhaka-vagga の諸版に  
関する一考察

南 清 隆

じつは Aṭṭhaka-vagga (＝Av.) 諸版と呼ぶのは、漢訳『義足經』及び skt. 断簡 (JRAS. 1916 所収) ではなく、Suttanipāta (＝Sn.) 第四章の PTS. 版と所謂 Oriental Editions のうちつかを指す。従って、それらは南伝上座部派内の伝承資料であるため大規模な相違は見られないが、細部の異同は多数存在する。各版本は、いくつかの原資料に基づいて特定の語形が採用され校訂が加えられたものであるから、異同の比較対照によつて Mss. 流布の系路・時代、校訂者の配慮等の考察を要する問題を有している。そこで、Sn. PTS. (＝P.)・ビルマ第六結集 (＝B.)・シャム王室 (＝S) 各版を対照し関連註釈書を参照して、三版に見られる異同の特徴やその原因を探ってみた。その作業に対する方法論や詳細な論述は別稿に譲り、小論では資料的付加を意図して Av. 中の異同例を二三呈示する。(前出以外の略号は Critical Pali Dictionary epilegomena to vol. I, Copenhagen 1948. の表記に依拠する。)

別稿で指摘したように、Sn. の註釈文献である Pj. II に明記されてゐる異同のうち、Sn. P 版 881 a は注意すべき箇所の一つである。Pj. II P 版 p. 554 f. には、上記の句を (1) Sandiṭṭhiyā ce va na vivadāta. (2) sandiṭṭhiyā ce pana vivadāta. と呼ぶ二種の

典籍 (pāṭha) が、既にこの書の著された時代に存在したことが述べられてゐる。これに対して、Sn. 881 は P 版による。

sandiṭṭhiyā ce pana vivadāta  
samsuddhapapaṇā kusala mutima  
na tesam koci parhinapaṇāṇo  
dīṭṭhi hi tesam pi taḥā samatā //

もつ、自らの見解によつて清浄で

淨き智の善なる賢人 (となる) なら、  
彼らには卑しい智の人はいなくなる。

彼らの見解は等しく完全なものだから

とあり、先の (2) を採用している。一方、この偈に対応する B, S 各版は、それぞれ a 句を

B, sandiṭṭhiyā ce va na vivadāta  
S, sandiṭṭhiyā ve pana vivadāta

とし、B 版では (1) が、S 版ではほぼ (ce + ve 以外は) (2) が採用されていることになる。否定辞の有無は、句の意味を正反對にしているのであるが、本偈の内容は前後の文脈を考慮すると、個々の見解を持つ人々は、各自が正しいと主張するが、いずれが本當に正しい人なのか、という問い (878～879) に対する仏陀の答えである。

そして、880 に a b 句を仮定法の従節にした反語的表現の答えがなされ、本偈もそれに準じた構成と考えられる。そうすると、B 版のように、自らの見解によつて清浄でなく、……となれば、ce も不用となり、文脈上からもそぐわなう。ところが、この異同は Nidd. I 中の対応偈にも各版毎に同様の形で存在し、それぞれの表現に適した散文の註釈がなされてゐる。つまり、Sn. 間の異同

にとどまらず、各版本の系列下で語形の統一化が施されていることになる。いずれにしても、この部分の内容上からは、P版の校訂が最も適切と考えられる。しかし、これとは反対にP版の校訂に再考を促し、B或いはS版の語句がそれを是正する用例となるのではないかと思われる異同も多い。以下は、そのような箇所の一例である。

P版 791 d *kapiva sakham pamuccam gahva*

S版は *pamuccam* を *pamukham* とする。猿 (*kapī*) が木の枝 (*sakha*) をたどって移動する様子を表現しているのであるが、(枝を) 捕え放つ、とらうところからは *pamuccam* が適しているも、文法的にながらなり。(放つ) 枝を捕える、となる)。対して、*pamukham* (突き出した) は、*sakham* の修飾語として理解でき、韻律上も適している。また、PTS, Dic. (p. 417) の *pamukha* の用例中にこの句を指摘する。

P版 872 c d *icchā na santā na mamattam atthi,*

*rūpe vibhūte na phussanti phassa //*

c 句を B版は *icchāyā santā* …… S版は *icchāya asantā* ……とする。この句は『欲望がなり時』『我がもの』と執することなし、となり、d 句 *rūpe vibhūte*… (Absolute loc.) との対応からも、B、S版が適切な表現。更に韻律上からはB版が最も適。

P版 885 c *saccāni su tāni bahūni nānā*

B、S版は *su tāni* を一語 *sutāni* と解する。Nidd. I (p. 294) の註釈文から *su* > *sru* > *suta* が支持される。(但し cf. A. K. Warden, *Pāli Metre*, p. 76)

P版 911 d *upekhatī uggahananta-n-aññe*

B、S版は共に *upekhatī uggahanantī-n-aññe*。校訂のように、*-ñ* を挿入音と見るなら、P版には *case ending* が存在しない。(912 d も同様)

P版 914 c *sa pannabhāro muni vippayutto*

B、S版は *vippayutto* を *vippamutto* とする(及びS版の *前分* を *sampannabhāro*)。P版は、分離・不相応の意。重荷を降した牟尼のごとびあるから、自由になった、の意である *vippamutta* の方が適切と思われる。但し *vi-payuj* から、束縛を離れた、という意味が類推できるが用例未検出。

P版 937 a *samatam asaro loko*

B、S版は *asaro* とする。『虚偽・不実』という *a-saro* が、P版では短音節化しているが、この語形は他では確認されな。但し韻律上はP版が適切。

P版 939 d *na dhāvati nisidati.*

B、S版は共に *na dhāvati na sidati*。P版によれば一つの否定辞が二つの動詞にかからなければならぬ。構文上は、それぞれに *na* が付加される方が適切であろう。

前述のように、文献的操作の詳細は、拙稿『パーリ文献史研究の一視点——スッタニパータ第四・五章を資料として——』(『仏教史学研究』第二四卷一号)を参照されたし。(註記省略)

(仏教大学大学院)